

FD NEWSLETTER



CONTENTS

- 高大連携 高校の視点から
駒澤大学高等学校 校長 鈴木貞雄
- 駒澤大学に期待すること
駒澤大学高等学校 英語科教諭
松川 誠二
- 平成22年度公開授業
文学部教授 勝原 晴希
総合教育研究部助教 柳 浩二郎
総合教育研究部講師 福田 一貴
総合教育研究部講師 勅使河原三保子
- FD研修会
- FD推進委員会の今後の活動予定

高大連携 高校の視点から

駒澤大学高等学校 校長 鈴木 貞雄

高大連携は高校と大学の連携による教育活動全般を指し、必要により大学における学修を高校の単位として認定することも一つの方策である。連携は高等学校の教育活動を補い、多様な学習形態および展開ができ、生徒の学習意識や学習意欲を向上させる。教科学習のみならず、より発展的・専門的な学習ができ、高校教員では対応できない高度な学習が可能となり、大学が求める学生像と教育内容への理解が図られる。また、大学生活を体験することにより、学習や進路選択に対する考え方が深まり、自らの生き方や在り方を考えることができる。さらに教員相互の理解を深め活性化を図ることができるなどの利点があげられる。

従来の高大連携としては①相互理解を図る推薦に関する委員会②高大一貫教育検討懇談会③オープンキャンパスへの参加④保護者対応の説明会④進路別学習の出前授業⑤基礎学力向上のための補習授業⑥推薦決定者への事前学習（レポート提出）⑦学科による懇談会⑧高校への教育実習受け入れ⑨大学での法要参加などをあげることができる。

昨年度、高大一貫教育検討懇談会が数回にわたって開催され、「附属高校生推薦入学制度における学内併願制度」（提案）について議論した。現在、一定数が推薦入学者として駒澤大学に受け入れられている。国公立大学への進学を希望する場合に限り、駒澤大学への推薦と国公立大学受験の併願が認められている。提案主旨は第二志望の学科・専攻への推薦入学が認められた場合、第一志望として届け出た学部・学科の一般入試及び国公立大学受験の併願を認めるというものである。併願機会の拡大により、推薦決定後の学習意欲の停滞を防ぎ、学習の継続性が高まると考えられる。

高大連携の強化は生徒の学習意欲と学力の向上を図り、大学入学にあたっての事前教育、補習学習や入学後の初年次教育・個別指導など、高校生にとって不可欠と考える。今までの高大連携内容を再検討し、相互理解のもとに上記制度の確立を進めたい。

連載企画：よりよい教育のために

「駒澤大学に期待すること」

駒澤大学高等学校 英語科教諭 松川 誠二

とあるコンサルタント発行のニュースレターを読む機会があり、その中の小見出しに「現代に特有のバカとは」というタイトルの記事があり目を引かれました。要約すると「現代版バカ＝自己による価値判断能力が退化した人間」というものです。一時は教育機関に席を置き、惜しまれつつその場を去った筆者の言葉は、現代社会における教育機関の脆弱さに言及したものとして多数の読者に捉えられました。

「ヒエロファニーは、実存の危機に顕現する」とエリアーデは述べましたが、本校のみならず現代の高校生は「聖」と「俗」とのバランスが崩れ、この「実存の危機」に極めて近づいています。本校に限ったことではなく、自ら動くこと無く他力本願的に何かを求めている生徒たちの価値判断能力を欠いた状況はエリアーデの言葉そのものでしょう。現在、実存の危機にある若者が、価値判断能力を備えた生きる力を手にすることは極めて困難な状況にあるように思えてなりません。ならば学校教育はその点を注視して日々の教育活動を進めて行くことが必要です。

「自己による価値判断を持った人間」を育てることは高等学校においては、学習指導要領が述べる「生きる力」をつけることと重ねて考える必要があります。生きる力の欠如と実存の危機は常に一体だと私は考えているからです。研究機関としての役割も大きい大学においては、高校と微妙に異なる視点から学生教育を行うはずですが、附属高校と大学との関係はその部分、つまり「生きる力とは何か」という点で何らかのコンセンサスを持つことが必要不可欠ではないでしょうか。

さて、高大連携を考えた場合、まず大切なのは情報公開による双方スタッフの意思統一であると考えています。その出発点として高校側の意識改革・内部改革が必要不可欠です。

高大一貫教育検討懇談会のメンバーとして大学側の皆様と話しをさせていただきました。高校側は現在考え得る最善の手順で大学への推薦する生徒を選考しています。現行制度上は今の

方法が最適です。が、大学の先生から我々が送った生徒に関してお叱りの言葉をいただくことがしばしばあります。その裏側には問題が存在することは否めません。例えば、学部（学科）による推薦対象者の成績分布があります。成績上位者が固まる学部（学科）があれば、年度によって成績が大きく別れる学部（学科）があり、どちらにもその逆が存在します。これは単純な学部（学科）人気という単一要素が生み出すものでは決してありません。その背景には生徒たちの持つ様々な思惑があり、高校側はそのことをしっかりと受け止めております。

ここに大学高校間のギャップがあり、このギャップに何らかの掛け橋を渡すことが課題の一つであると思います。その掛け橋とは「統一見解の構築」と言い換えてもいいでしょう。

大学へ要望したいことのの一つは、是非高校の授業を実際にご覧いただきたいということです。我々が生徒にどのような言葉を投げかけ、何を考えさせ、何を伝えようとしているのか、それを見てください。そして率直な意見を届けていただくことを切に願います。同様に大学の授業見学も実施していただきたいと思います。その中で、「駒澤」の社会的な役割を改めて俯瞰しつつ、我々の進むべき道を模索かつ確立していくことが望ましいはずです。

まずは高校側の改革が必要だと述べましたが、これには相当な努力が必要になってきます。とは言え、今や学校においても顧客満足度という言葉はごく普通に使われるようになりました。そして実際の顧客満足度を計るためには客観的な評価が必要です。その客観的な評価を生み出すためには第三者による詳細な観察が必要になります。その実現の第一歩として「より実りある情報交換ならびに交流の場を作る」ことが必要ではないでしょうか。

平成22年度公開授業

平成22年度「公開授業」を以下のとおり実施した。「公開授業」は、授業改善のための教員による相互研鑽を目的とし、工夫に富んだ授業に接し、その体験によるさまざまな発見を通して、今後の授業改善のためのヒントを得ることにある。公開授業は、各学部等のFD推進部会のご協力により、各学部等主体にて実施された。

担当教員	科目名	授業内容
仏教学部 教授・角田 泰隆 講師・池上 光洋	坐禅	全学共通科目の中の宗教教育科目であり、仏教学部以外の学生にも希望者に「坐禅」を体験してもらえよう半期単位で開講しています。授業の前半は只管打坐（ただ坐る）、後半は道元禅師の『正法眼蔵坐禅儀』を学んでいます。 丈の長いスカートやゆったりしたスラックス等、坐りやすい格好でおこしてください。
文学部 教授・勝原 晴希	基礎国文学Ⅱ	短篇小说を読む
経済学部		経済学部は、11月29日（月）から12月4日（土）の期間に公開授業を実施します。実施科目については、KONMAのインフォメーションでお知らせいたします。 （実施科目：53科目を予定しています。）
法学部 准教授・赤松 晃	税法	11月に学習した相続税・贈与税の「まとめ」を行い、新聞報道等を通じて平成23年度税制改正の動向とその意義を検討する。
法学部 准教授・柳瀬 昇	憲法	第23回「地方からみる民主主義」です。なお、木曜日1時限にご都合が付かない方は、下記のURLからも、平常の講義をご覧ください。 http://gc.sfc.keio.ac.jp/cgi/class/class_top.cgi?2010_25098 http://zen.shinshu-u.ac.jp/modules/009500000/
経営学部 講師・河合由佳理	国際会計論	国際会計基準における無形資産の取り扱いについて
医療健康科学部 教授・熊坂さつき	放射線生物学	2年後に受験する国家試験を意識させる事に重点をおき、実際の国家試験の問題を解かせながら、クイズ形式で学生参加型の解説をしている。
グローバル・メディア・スタディーズ学部 講師・杉森建太郎	Listening Skills & Strategies	GMSサイトにアップロードしたビデオ教材を使用して、リスニング、シャドーイング活動を行う。また、扱われている社会問題について考えることを課す。
総合教育研究部 講師・福田 一貴	英語ⅠA	形容詞節、副詞節の理解と実践
総合教育研究部 助教 柳 浩二郎	健康スポーツ実習 (体操・トランポリン)	準備運動、柔軟、基本運動、トランポリン、鉄棒、ミニトランポリン班に分かれて各種目を実施する。

FD公開授業を終えて

文学部教授 勝原 晴希

11月18日(木)2限の「基礎国文学Ⅱ」で公開授業を行いました。お忙しい中をお越しいただいた教職員の方々、本当にありがとうございました。

「基礎国文学Ⅱ」は、国文学科の一年生を対象に、近現代文学専門の専任教員三名によって、三クラスに分けて行なわれています(国語学は「基礎国語学」、古典文学は「基礎国文学Ⅰ」のクラスです)。内容的には、高校までの学習から大学での専門的研究への橋渡しとしての導入教育と、専門的研究のための基礎教育という位置づけです。どのような素材(作品)を用い、どのような方法で進めるかは三人の教員によって異なりますが、上記の位置づけのもと、高校から大学への導入と基礎づくり、すなわち文学研究の方法、とりわけ文学作品をどのように分析するか、作品を読むとはどういうことかを学ぶという点では、三クラスに違いはありません。

ご参加いただいた教職員の方々に、授業の前提(シチュエーション)をご理解いただくために、最初の15分ほど、4月からのこれまでの内容を振り返り、確認をしました。わたしの授業では、学生自身が自ら作品を「読む」ことを重視しています。そのため、一方的に教員が作品について分析をし説明をするのではなく、作品ごとにあらかじめ課題を与えてレポートを書いてもらい、学生たちが書いてきた内容をふまえて、「こういうことに気づいたのだろうか」という形で説明をするようにしています。その繰り返しを通じて、「読んでいるけど、読めていない」こと、「作品の内容(あらすじ)だけに気を取られて、作品そのものである言葉それ自体に注意していない」ことを体感してもらうのが授業の狙いです。

ご参加いただいた先生からは、「後ろで寝ている学生がいましたよ」、「板書が多すぎもせず少なすぎもせず、学生にはちょうど良いようでした」、「ほかの先生の授業を見る機会がないので、いろいろ参考にさせていただいて、参加して良かった」とのお言葉をいただきました。できるだけふだん通りに行なったつもりですが、教職員の方々が後ろにおられるだけで、どうしてもふだんとは雰囲気違ってしまいます。公開授業というのは、参観することそれ自体が影響を与えてしまうという意味で、ハイゼンベルクの不確定性原理のようなものなのかも知れません。とはいえ、せつかくの機会なのですから、もっと多くの方々に

見ていただき、感想を頂戴したかったというのが正直な気持ちです。



公開授業を終えて

総合教育研究部スポーツ・健康科学部門助教 柳 浩二郎

12月6日に「健康スポーツ実習」の公開授業を行いました。健康スポーツ実習の授業では、第1回目の授業時間を利用してオリエンテーションを行い、そこで学生自らが受講するスポーツ種目の選択を行います。

今回、私が実施した健康スポーツ実習の種目は「体操・トランポリン」です。「体操・トランポリン」という種目は日常生活では行われなない体の動かし方をします。例えば、逆立ちや回転、ひねり運動などがあり、これらの運動は日常生活では体験できません。つまり非日常的な運動であり、それが他のスポーツ種目とは違う「体操・トランポリン」の授業における魅力であると私は思っています。

私がこの授業の目標にしていることは、「できないことをできるようにする」ということです。「最近の学生はすぐに物事を諦めてしまう」という話を聞きます。そのため、「最初ではできなくてもあたりまえ」であり、「できないことをできるようにする努力が大切」と私は授業において学生に言っています。後期の授業の開始(第2回目の授業)で課題表を配布し、できる課題とできない課題をチェックしました。そして、今回の公開授業は

10回目の授業にあたり、最初できなかった課題がどれだけできるようになったかを再度チェックしました。

最初のチェック時、「こんな課題は難しすぎてできない」と学生達は口を揃え言っていました。今回チェックをして「できない」と思っていたことがいつの間にかできるようになった学生が多数となり、学生自身で達成感を得ることができたのではないかと思います。

その「できないこと」を「できるようになっている」と感じることができたのは、学生同士で課題ができる学生ができない学生に教え、アドバイスや声かけ補助などをしてできるようになることによって、達成感が得られたのだと感じます。特に私の授業では、講義形式の授業では体験できないことですが、学生が「できた」と大声を出し喜び、周りの学生も喜んでいて姿をよく目にします。

教員が授業を工夫し、学生自らが楽しむ、興味を持つような実技内容を考える、そのためのポイントとなる点を教員がアドバイスをすることはもちろんですが、学生自身が「身につけよう」「できるようになろう」という思いを抱き、また学生同士が切磋琢磨することがより良い授業に繋がっていくのだと私は思います。



公開授業を終えて

総合教育研究部外国語部門講師 福田 一貴

Aller Anfang ist schwer. 「全ての初めは難しい。」これは、大学2年のとき新しい言語を学ぶ際の心構えとして教わった諺

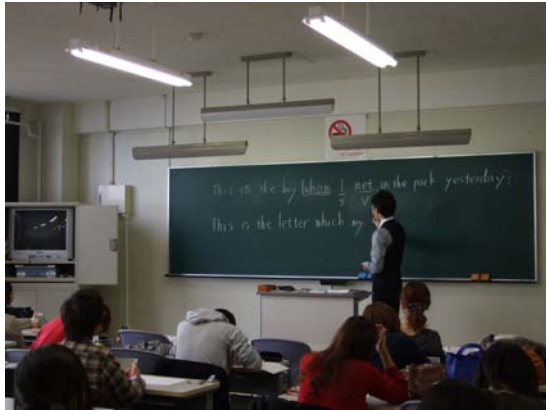
である。それ以来、何か新しいことを始める際には、この言葉を思い出し、物事が軌道に乗るまでは困難がつきものだと考えるようになっていく。英語を学び始める際、アルファベット順で並べられている単語帳を用いて英単語を全て覚えようと試み、**abandon** 「(計画などを)(途中で)あきらめる、断念する」という語で、文字通りに暗記の計画を「あきらめて」しまうという笑い話がある程、やはり物事の初めは困難が伴うのであろう。大学における新年度も、新しい学生と新しい授業を始めるので、担当する学生とクラスの雰囲気慣れ、軌道に乗るまでは「難しさ」を感じる。しかし、本年度は単に新学期が始まるだけではなく、本学に専任講師として着任したので、新しいことが重なった。新学期からすでに8カ月は経つものの、未だに毎日が試行錯誤の連続である。先の言葉に従えば、「難しいこと」だらけである。

このような中、FD推進委員会の公開授業を11月26日に行った。今回、公開した授業「英語IA」は、英米文学科の1年生の必修科目で、「読み・聞く・書く・話す」という、いわゆる英語の4技能のうち、「書く・話す」という発信型に重点を置く科目である。この2技能を重視しながら、これから先の英語の勉強に役立つ基礎を固め、英語にさらに関心を持ってもらうことを個人的な目標としている。公開した授業の内容は、ある程度まとまった英文をCDで聞き、直後に音読。そして、その場でその英文を暗記し、直ちに、覚えた英文を(必要な場合には日本語訳を参照しながら)全員(参加いただいた教職員の方々も含む)の前で暗唱してもらった。次に、今回の授業の主題である「形容詞節」に関して、授業中に暗記した英文を応用しながら、こちらが予め用意した少し難易度の高い英文をその場で英訳していった。このように異なった活動を多く取り入れたのは、1つには、学生が90分間集中力を欠かさず、授業を一方向的に聞くことは難しいのではないかと考えたためである。

また、公開授業直後には、参加いただいた教職員の方々から有益な意見をいただく機会を得ることができた。その中で、こちらが予め用意した文以外にも、関連する文を学生たちに考えてもらい、それを英文にすることで、もっと積極的に授業に興味を抱く環境を整えることができたのではというご意見をいただいた。これは学生と共に授業を構成し、さらに授業に活気をもたすことができるので、各クラスの状況を見極めながら、是非とも取り入れていきたいと思った貴重なご意見であった。

今回、公開授業を行ったタイミングが、初年度という様々な困難と格闘し、軌道に乗る前であったことも幸いし、この時期

だからこそ修正も施しやすく、上記のような指摘をできる範囲で授業に反映し、よりよい授業を作っているのではと実感した。最後に、お忙しい中、参加いただいた教職員の方々、公開授業をする最中、緊張する私を気遣ってくれ、授業に積極的に参加・協力してくれた学生の皆さんに感謝をしたい。



公開授業を参観して

総合教育研究部外国語部門講師 勅使河原 三保子

11月26日(金)2時限目に、部門の同僚である福田一貴講師による英米文学科の1年次生の1クラスを対象とした英語必修科目である英語IAを参観しました。本来ならば授業の実録を交えて福田先生による授業の批評を行うべきなのでしょうが、今回はそのような形はあえて取らず、細かい批評の内容は同僚である福田先生に私から直接お伝えすることとして、以下では、今回の公開授業参観を通して考えさせられた公開授業のあり方などについて、私自身の今までの経験に基づきながら、述べさせていただきます。

私は前職(徳島大学大学院国際連携教育開発センター)で、創設直後の学生の留学交流プログラムの下、工学教員に対する英語支援に携わる機会がありました。その一環として先生方に英語でワークショップを行い、各先生方に英語で模擬授業をしていただき、ワークショップ参加教員と共に授業を批評する活動を取り入れていました。日本人教員にとって、自分が行っている授業に必ずしも否定的な意見を述べられなくとも批評され

るということは、必ずしもやさしいことではありません。ワークショップでの各教員による模擬授業も、そのような理由により、またFD活動の一環として本学と同じように行われている公開授業の盛り上がりには欠ける様子からも、開始前は成功が疑問視されていました。しかし、心配をよそに、模擬授業批評会では(全て英語でやりとりしたのですが)有益なコメントのやりとりができることが多かったです。一つには、英語を介することにより、授業のやり方自体が批評されているという意識をそらす効果があったのかもしれませんが。もう一つには、手前味噌をお許しいただくとして、ワークショップでは全員が批評される項目が記されたシートを持ち、批評会もそのシートに従って行ったため、焦点の定まった批評ができたのではないかと振り返ってみて考える次第です。本学の公開授業においても、たとえば参観者が共通の採点項目のようなものを持って授業に臨み、それを参観終了後、授業担当者にお渡しするというのを試みとして行ってもよいのかもしれませんが。しかし何よりも、まずは教員が授業への批評を人格への批判と切り離して考え、互いに授業を参観しあうことへの抵抗感をできるだけなくすようにすることを目指すべきではないでしょうか。若手もベテランもいつでも授業には改善の余地はあり、本人の努力次第で改善できるはずで。各教員が授業参観での批評を真摯に受け止め、次回以降の授業に生かすことが教員本人にとっても、授業を受ける学生にとっても最善となることを信じ、公開授業自体の方法にも改善の余地はあるでしょうが、私自身はこのような取り組みを支持していきたいと思います。また、公開授業以外であっても、私自身はいつでも他の先生方に授業を見ていただき、改善点等を指摘していただきたいと改めて実感しました。

FD研修会

駒澤大学FD推進委員会では、さまざまなFD活動を行っています。その一環としてFD研修会を毎年実施していますが、昨年度からの検討課題である初年次教育について、次のとおり開催し、多くの教職員の参加がありました。FD研修会の内容については、次号のFDニューズレターで報告いたします。

日 時：平成22年11月29日（月）
午後4時30分～午後6時

場 所：9-280 教場

演 題：「本学における初年次教育の現状」

内 容

1. 駒澤大学教育改革検討委員会「初年次教育・導入教育の再検討」WG 検討結果について

学長 石井 清純先生

WG 座長・入学センター所長 小川 隆先生

WG 委員・FD推進委員会小委員会委員長

中濟 光昭先生

2. 初年次教育学会第3回大会の報告について

FD推進委員会小委員会委員長 中濟 光昭先生

司 会・・・FD推進委員会委員 逢見 明久先生



入学センター所長 小川 隆先生



FD推進委員会小委員会委員長 中濟 光昭先生



学長 石井 清純先生



会場の様子

FD推進委員会の今後の活動予定

- 平成22年度第7回FD推進委員会小委員会
平成22年12月21日(火)

*FD活動についてご意見がありましたら、各学部等のFD推進委員会小委員会委員まで申し出てください。

事務局便り

～初年次教育学会第3回大会に参加して～

本学は、2010年度に機関会員として初年次教育学会に入会しました。初年次教育学会は、初年次教育に関する研究と実践の有機的発展とその成果の普及による大学教育改善への貢献及び会員相互の研究交流の促進を目的としています。

今回、平成22年9月11日～12日に高千穂大学で開かれた初年次教育学会第3回大会に参加しました。

学会の1日目は、企画セッションⅠ(ワークショップ、ラウンドテーブル)とシンポジウム「初年次教育のリアリティから質保証の意味を考える」、2日目は、企画セッションⅡがあり、自由研究発表会に出席しました。

シンポジウムでは、宮崎学園短期大学、高千穂大学、千葉大学の3大学の取組による事例報告、読売新聞社「大学の實力」記者の講演があり、その後、国立教育政策研究所統括研究官の川島啓二氏が司会となり、パネルディスカッションが行われました。

川島氏の「エビデンスの体系的集積としての質保証だけではなく、実効的なプロセスを重視する質保証のあり方もありうるのではないか」という問題提起の下、教育の質保証の時代における初年次教育のアイデンティティとは?という観点での議論があり、内部質保証の枠組みにおける初年次教育の役割を理解することができました。

また、今回の大会で、他大学等の研究成果や担当教職員による初年次教育プログラムの数多くの発表を聞いて、大学教育の実情の把握と問題意識を共有することができました。

事務局に学会誌及び今大会の要旨集がありますので、ご自由にご覧ください。

編集後記

今号の巻頭には、駒澤大学高等学校校長の鈴木先生から「高大連携 高校の視点から」を、連載企画には英語科教諭の松川先生から高校の現状を踏まえての大学に対する要望を頂きました。駒大の建学の精神の教えをすでに受けている附属高校からの学生には、さらにしっかりとした教育理念、実践の強化を図ることが望まれます。

公開授業では、全学的な展開を通じて教員同士の輪が広がりました。狭い枠に捉われることなく、授業改善に資する活動を今後とも続けることが大切です。FD研修会では、石井学長から、「初年次教育と建学の理念」についての話がありました。建学の精神の涵養は、国際化に繋がると考えられます。「自己の探求」を見据え、さまざまな取組を通じて初年次教育の質の保証を構築し、カリキュラムの充実を図ることが大切です。

中国の大学卒業生数は1998年度の83万人から、昨年度は600万人以上に達したといわれています。このように世界は大きく変わってきていますが、そのような動きにもあまり捉われ過ぎることなく、一期一会(One Meeting, One Life)、まさに一回の授業を、人との出会いを大切に、着実に一步一步実りある教育実践に努めることで未来のある大学が見えてきます。

この『FD NEWSLETTER』25号が本学のよりよい教育の一助になれば幸いです。

最後に、大変お忙しい中、本号に原稿をお寄せ頂いた先生方にお礼申し上げます。

(高野 秀夫、下谷内 勝利)

【タイトル横の写真は、駒澤大学高等学校】

FD NEWSLETTER Dec. 2010 第25号

発行日：2010年12月22日

発行者：駒澤大学FD推進委員会

〒154-8525 東京都世田谷区駒沢1-23-1

TEL 03-3418-9125 Fax 03-3418-9114

(事務局：教務部)